

## 英国EU離脱とドイツ理想主義

人の移動の自由、どこまで・どのように認められるべきか

高部英明 ドイツ・ヘルムホルツ研究機構上席研究員、大阪大学名誉教授

昨年8月に私がドイツに移住したのは、欧州の複数の大型レーザ装置(ELI など)による新しい科学に魅力を感じたからである。こちらに来てすぐEUに住んでいることを実感した。100万人を超える難民を受け入れるドイツ人の寛容さには、感心するというより、あきれる思いであった。ドイツ政府の対応には疑問も感じていた。だから、英国でEU離脱の国民投票があったとき、私は内心、離脱賛成であった。

今回の英国離脱をきっかけに、「人、もの、金」の移動の自由を保障したEUの理念を加盟国で検討し直し、特に「人の自由な移動」の可否が議論され、現実的な合意が見出されることを期待している。

### 1. 経済統合から政治統合へ

EUの始まりは第1次・第2次世界大戦の主要な原因であった仏独国境の地下資源(石炭・鉄鋼)を共同管理することにより、紛争を避けようとする政策だった。6カ国による共同体がド・ゴールとアデナウアーの強い絆で1951年に発足した。その後1958年に欧州経済共同体(EEC)が設立。1967年には欧州共同体(EC)となり、英国は1973年に加盟している。冷戦の終結を受け、1993年に欧州連合(EU)へと政治統合の色彩を帯びて発展。英国離脱の要因となった東欧諸国も加盟してきた。

私は1980年9月から1年間、冷戦時代の西ドイツ・ミュンヘンに客員研究員として滞在した。当時はECの時代とはいえ国境の概念はしっかりあり、アウトバーンで1時間のオーストリア国境には国境警備隊がいてパスポートの提示を求められた。さらに、物価も欧州の北と南で大変異なり、好景気のドイツからイタリアなど南欧の国に旅行すると食事もホテルも安く、物価の格差を大いに楽しんだことを思い出す。

また、西ドイツは国境警備が厳重で、窃盗・盗難などの被害からは安全な国であった。1988年に1ヶ月、ローマ郊外の研究所に滞在した際は、ドイツでは考えられないジプシーの子供たちによる盗難に遭遇し、国境を境に大きく異なる欧州の内実を実感した。ジプシーは現在「国籍を持たないEU民」となり、夏場は日本人客などの多い欧州の北部に出稼ぎに来る。例えば、2014年、1日平均20件の盗難がケルン駅周辺で起こると警察から聞いた。

EUの拡大は冷戦と切り離すことはできない。ドイツの知人は「EUは冷戦の産物であり、冷戦の終結で求心力を失い、東欧に拡大したことで混乱が生じている」と言っていた。1991年のソ連邦崩壊、ドイツの再統合などを経て、旧共産圏の東欧の国々が2004年にEUに加盟し、加盟国は28カ国にまで肥大化した。そして、「経済統合から政治統合へ」という質的な変化が起きた。これが、英国離脱の遠因となった。



外務省ホームページより

私が離脱賛成と感じていた理由はここにある。NATOの東欧への拡張と相まってEUが政治的な色彩を強くしていった時、将来の大きな問題をはらむことになった。まずは、EUの理念である「人、もの、金」のEU内の自由な移動。米国に対峙しうる「欧州合衆国」の方向へと、欧州官僚（いわゆるブリュッセル官僚）たちは強引に牽引した。1980年代、当時のEC委員会は連邦制を導入しようとしてサッチャー英首相の頑強な抵抗に遭った。さらに、EU憲法も仏等での国民投票で否決されるなど彼らの野望はつまずいたが、官僚たちの独善の共同体構想は着々と推進されてきた。

## 2. ドイツ観念論的理想主義

EU官僚たちの構想を後押ししたのがドイツである。英国は伝統的に現実主義であるのに対し、ドイツは理想主義。ドイツの理想主義がナチの悲劇を黙認したと私は思う。

現在はナチの歴史的災禍のトラウマを抱え、人種差別と取られかねない発言をすると「人種差別者」＝「ナチ思想」のレッテルを貼られてしまう。研究所の人たちに「100万単位の難民をドイツは受け入れるべきだと思いますか？」と質問すると、「人道的観点から受け入れるべきだ」と同じ答えしか帰ってこない。ドイツは憲法で「政治的難民を我が国は庇護する」と謳っている。日本の憲法第9条と比較すると分かりやすい。

私はドイツに住んで「現在のEU域内のEU構成員の自由移動は時期尚早」と強く思った。東欧の国を訪ね、西側と経済をはじめあらゆる面での格差に愕然としたからだ。実際、英国でのEU離脱派が発言力を持つようになったのは、経済格差の大きい東欧の国民の自由移動が顕著になったからである。

英国でも移民批判をすると「人種差別主義者」のレッテルを貼られる。建前を捨て本音をスローガンにした離脱派が多数を占めたという今回の結果を見ると、ドイツでも本音がくすぶり始めた移民問題は予断を許さない。メルケル首相は国民の意識変化を読むことに長けた政治家であり、反原発は見事に成功した（拙著 [WEBRONZA記事](#)）。しかし、今回は国内問題でなく残り27カ国が加盟する連合体の政策転換であり、難易度ははるかに高い。

## 3. グローバル化は経済格差を生んだ



難民宿泊施設の一部

ドイツ国民の本音を代弁するならば、15年来の友人である大学教授が私に訴えた内容になるだろうか。6月初めに会った際、彼は「この国はクレージーだ。資格審査もせずに100万人の難民を受け入れた。そして税金で彼らにアパートを与え（彼の家がある人口1.8万人の町では140人の難民受け入れのため、アパートを新築）、生活費も出し、遠いアフリカの友人と連絡できないと寂しいだろうと

携帯電話まで支給している。そして、彼らが経済難民か政治難民かをよく分からない書類で人手と歳月を費やし審査する。その間、難民はストレスのたまる毎日を無為に過ごし、街をぶらつく。お前だってクレージーだと思うだろう」と私に迫った（写真）。

私が1980年に住んでいた時のドイツは大変な好景気だった。当時のドイツで、今回の英国で問題とされた移民に相当したのがトルコや北アフリカからの労働移民だ。そしてドイツ政府は、景気の減退期になると、労働移民に「帰国政策」を推進。トルコなどへの帰国を経済的に支援して失業者の増大に伴う問題を解消しようとしたのである。ドイツはこの時の教訓を忘れたのだろうか。

今や域内の物価格差が薄れた。しかし、それはイタリア、スペイン、ギリシャなど物価が安かった国が高くなることで均一化された。イタリアの友人は「昔は毎週末、家族でレストランにでかけ夕食を楽しんだ。今では月に一度の外食もままならない」と嘆いていた。

2006年にギリシャに会議で出かけた時、あまりの物価の高さにレストランのウエイトレスに「なぜこんなに高いの。これじゃドイツなんかと変わらないじゃない」と冗談半分に言うと、「私も政府に文句を言いたいわ。EUになって誰が得をしているのか知りたいものよ」と返された。

#### 4. 次世代の繁栄を考えるドイツの若者

英国では年配者の多数がEU離脱を支持し、若者の多数は残留派であった。研究所の若手ドイツ人研究者とこの問題を議論した。彼「ドイツの繁栄は60年代からのイタリア南部、ギリシャ、そしてトルコなどの移民の下支えのお陰だ。今回の難民は次世代・次々世代のドイツが競争力を維持するために必要だ。何かあっても、耐えなければならない」。私「でも、ミュンヘンではドイツ生まれの移民二世が疎外感からテロに及んだ。移民はドイツ内に移民居留地をつくって社会に溶け込まないのでは」。彼「数件の不幸なことを理由に判断してはいけない。エリートに登りつめた移民二世もいる」。

ドイツでは討論を積極的に取り入れた教育が行われているが、移民・難民受け入れに関しては憲法もあり、受け入れの是非を問う公開の議論はないという。EU官僚は既にEUの若者がEUの別の国で学位を取らないと研究職を得にくい仕組みも作っている。高学歴若者は「汎EU世代」の先鋭である。英国のEU残留派はEUが当たり前の若者や、EU加盟で利益を得ているエリート層や資本家たちだ。

人道か治安か経済か未来か、絡み合う複雑な価値観の中、何がEUの発展をもたらすのか。英国EU離脱の交渉を官僚に任せるのではなく、制度見直しの議論が国民の目線で行われることに期待したい。私はEUという未来志向の政治実験の成果に大変期待をしているのです。



---

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.